印象記

川口博史
（金沢皮膚科）

２年半くらい前の日臨皮理事会の時に、「第30回の日臨皮総会が南関東山静ブロックにまわって来るらしいよ」という噂を聞きました。はじめに会場探しです。パシフィコ横浜会議場の予約は３年前から可能なため、第30回が神奈川主催と決まった時には既に他のイベントの予約が入っていて、2014年の４月26日～27日しか選択肢がありませんでした。GW直前の土日に、という批判はありましたがこのような事情でしたので御理解いただければと思います。

神奈川は、第３回を故中野政男会頭、第11回を加藤安彦会頭が主催されており、今回が３回目の神奈川主催でした。そのおかげで始めのころの会議が順調に運営できたことを先輩たちに感謝しております。次にイベント運営会社の選定作業です。数社から見積もりを取りましたが、それぞれ一長一短で、結局某先生推薦の地元の業者と契約することとなりましたが、これが後に皆の素晴らしい団結力を生み出すこととなりました。

栗原誠一会頭の参加者も我々も一緒に楽しもう、というお考えから、「日臨皮30年、皮膚科を楽しもう」のメインテーマはすぐに決まりました。そしてSigns & Symptomsを企画したいとおっしゃっていたので、これをメインの会場で企画することとなりました。その他いくつかの企画のたたき台を持って、県内の主任教授たちをアドバイザーとして御意見を頂戴しました。中には「このような企画ではうちの医局員は参加したいと思わないし、参加するメリットを感じない」など、手厳しい御意見も頂き、班長は焦って企画を練り直し、なんて場面もありましたが、準備委員会などで進捗状況を報告しつつ、企画が出来上がっていきました。このあたりの苦労話は各班長さんが述べていることと思います。

時は流れてプログラムの校正、という時期になって抄録が全然そろっていないことが発覚しました。虫食いだらけのプログラム集を見て皆驚愕！　あわてて抄録の催促、校正作業に取り掛かりました。実行委員のそれこそ夜を徹しての作業のおかげで、なんとか形になりましたが、それでも当初の予定を大幅に遅れての発刊となり、全国の会員からプログラムはどうしたのだと、日臨皮本部に問い合わせの電話が殺到していたとのことです。

学会前日の理事会、会頭招宴会からは、あれだけ時間をかけて準備していたものがあっという間に過ぎてしまい、気が付いたら最後の企画の公開シンポジウムでした。今回も医会の皆のすごい熱意、パワー、実行力を改めて痛感しました。浅学非才の小生が医会の幹事長を務めていられるのも、このような仲間がいるおかげです。総務ということで、現場で大した苦労もせずに学会運営に参加させていただき、誠に申し訳ありませんでした。そしてこれからも神奈川県皮膚科医会をよろしくお願いします。

以上、舞台裏をさらに裏から眺めていた者の印象記でした。

河原由恵
（けいゆう病院）

栗原誠一会頭のアイデアの数々とそれを実行に移していく執行部、実行委員の先生方のエネルギッシュな仕事ぶり……学術的なところはもちろん、エンターテイメント関係まで、どの分野にもエキスパートがいる神奈川県皮膚科医会のパワーと人脈を、あらためて実感した２年あまりの活動でした（具体的な仕事をほとんどしていない「総務」で、実働された先生方には大変申し訳ないです）。

アイデアを練る段階から会合に参加する機会を与えていただき、大変勉強になりました。学会本体の企画は今までにない斬新な切り口のもと、どの世代の先生にも満足していただけたことは間違いありません。注目してもらうことが難しい懇親会のエンターテイメントについても、開宴前の大道芸からジャズバンドの演奏まで、

参加した先生方が心より楽しんでくださっていたのは印象的でした。「神奈川県の皮膚科医」の固い結束力、素晴らしさをアピールしすぎる（？）と指摘されることもある私ですが、また自慢のタネが増えてしまったので自重しなくてはなりません！

小林誠一郎

（こばやし皮ふ科クリニック）

最上階の至極の空間「会議室」（別名：Peter）

若手班企画顛末を少々。「若手班」の一員として任命されたとき、趣旨を聞くまではなんのことかわかりませんでした。これからの皮膚科を任せる若い世代をできるだけ学会参加させるにはどうすればいいか。この命題は、日臨皮のみだけでなく医師会や各種OB会などにもいえると思います。

第１回会合が平成25年４月12日に行われ、集まった人全員がこの企画の全貌が見えないことを実感しつつも話をすすめて、なんとか形を見いだしたと思いました。５月15日のアドバイザー懇親会にてお披露目し、GOサインをもらえば安泰とだれもが思っておりました。が、当日リーダーは、集中砲火を浴び、撃沈との噂を聞いたのち、５月31日、急遽第２回の招集がかかりました。このとき若手班皆がきっと「いったいどうしろというのか？」と叫びたい気分であったと代弁いたします。第２回の会合では、はじめ重苦しいムードでしたが、なんとか打開策をねり、その後「魔法の水」も飲んだおかげで気分も明るく、リーダー頑張ってくださいと終了しました。その後無事に企画は通過し、若手班の会合も４回目を数えるころには、蒲原毅先生はじめ私以外の他の若手班員のお力により、講師も各大学への協力要請の段取り（根回し）も万端となりました。

平成26年２月15日の打ち合わせは、講師の先生にもこの初の試みについてイメージ統一のため集まって頂きました。当日は大雪の影響でたどり着けないのではないかと思いました。この会場は蒲原先生が、とりあえず東京支部総会の会場に近いところでとったという場所だったのですが、とってもおしゃれな「会議室」で、受付には外国人のきれいな「案内人」がいて見晴らし良好、夜景もきれい、たどり着いて本当によかったです。蒲原先生、素晴らしい会場ありがとうございました（写真）。

当日、はたして若手は来てくれるのかと心配でしたが大盛況、講師の先生も３つのテーブルを順にまわってレクチャーするのですが、どんどん調子がよくすすみました。参加した若手の先生方も非常に熱心でした。自分が若手だったらとっても参加したかったと自画自賛（私自身はたいして仕事をしてないのですが）する企画で、とっても楽しめました。リーダー蒲原先生、本当にご苦労様でした。

杉田泰之

（杉田皮フ科クリニック）

遠目ながら某大物歌手を見たという興奮に後ろ髪をひかれつつ、役割分担に遅れぬよう、演奏の途中でニューグランドの華やかな新館を抜け出しました。華やかな宴会場とは対照的に、旧館のボールルームでは斉藤隆三先生と日野治子先生による熟練の極意に聞き入る熱心な聴衆の姿がありました。若手を集めるはずの会にはベテランも多く、皮膚科学を極めたいという熱意があふれていました。学会前夜の好対照な二つの会場は、これから始まるのは並の学会ではないことを予感させるものでした。翌日からの学会の充実ぶりは誰もが認める通りで、盛り沢山の魅力的なテーマは神奈川県皮膚科医会のマンパワーの結実です。私は大した仕事もせず（高須博先生ごめんなさい）、My favorite signsの発表を聞きながら、これこそ臨床皮膚科医の存在意義だろうと

思いました。遺伝子解析やインパクトファクターが無縁でも、臨床医の眼から生まれた真理こそ、皮膚科学の発展に必要なのではないでしょうか。

高橋さなみ
（ひぎりやま皮膚科）

第30回日臨皮総会が大成功に終了し、心からお喜び申し上げます。私は女医班に加えて頂きました。とはいえ女医班は、実行委員であるなしにかかわらず、JDCメンバーの先生方がまさに一丸となってご協力下さり、チームワークは最高で、始めから最後まで和気あいあいと、本当に楽しく企画に携わることができました。メンバーの先生方のお人柄にふれることができ、先生方と今まで以上に親しくなれたことは大きな収穫でした。しかしながら私自身はといいますと、実行委員であるという自覚に乏しく、本大会が始まる直前まで栗原誠一先生、鎌田英明先生をはじめ、幹部の先生方の大変なご苦労に気づいていないところがありました。本当に申し訳ありませんでした。サブゼロでの前夜祭では横浜港の夜景に心を洗われ、先生方とおいしいワインで乾杯し、神奈川県皮膚科医会の一員であることを誇りに思いました。今後はこの経験をこれからの医会の活動のなかで生かしていきたいと思います。どうもありがとうございました。

袋 秀平
（ふくろ皮膚科クリニック）

参加された多くの方々からおもしろかった、どの会場に行こうか迷った、などのお褒めの言葉をいただきました。私自身も自分の仕事がなければ聞きたかったのに、と思う企画が多数あり、大変残念でした。全国規模の学会運営に関与するのは初めてのことでしたが、公開講座は増田智栄子先生、LOSは野村有子先生にお任せして、自分の仕事だけをさせていただきました。

神皮には、出身による閥はなさそうであるようなのですが、うまく融合した不思議な集団のような気がします。東京医科歯科大学の出身者は神奈川には少ないですが、少数民族である私にとっても居心地は悪くありません。東京ほど大きすぎず、神奈川はちょうどよい大きさなのかもしれません。これからもよい仕事をしましょう。

望月明子
（望月皮膚科医院）

いつの間にか実行委員になっていた日臨皮女性医師班。前年の名古屋のひつまぶしから始まって、いやあ、結構集まりましたね。神皮で、ホテルで、増田智栄子先生宅で。「楽しくなければ皮膚科じゃない」の栗原誠一先生のスローガンのもと、ほんとうに楽しかったです。増田先生、山川有子先生の大船に乗って、お二人のご苦労はいかばかりかと思いますが、日本医師会でも日皮会でも日本女医会でもない、市井で働く女性医師の姿をしっかり追えた企画だったと思います。若い先生の働きの素晴らしかったこと。それに新井裕子先生の大所をとらえたアドバイスはまさに的確でした。齊藤典充先生にも“白一点”常におつきあい頂いて、まさに女性医師の理想のハズの姿を見せて頂きました。最も聞かせたかった娘に、あの時間は無理と言われてコマ割りの難しさを実感。他のブロックもあまりに聞きたいものの多すぎた学会でしたので、今度は個々でまた聞きたいなあ。

山川有子
（山川皮ふ科）

女性医師班の班長として、女性医師班アンケートにご協力頂いた諸先生方に心から御礼申し上げます。神奈川県皮膚科医会の女性医師のパワーは強力で、私の心配をよそに素晴らしい充実した発表をして頂きました。女性医師はそれぞれが努力を重ねて困難を乗り越え、医師として色々な形で社会に貢献している、という事をあらためて実感致しました。これならこれからも日本の皮膚科は大丈夫！　みな、ずっと働き続けよう！　また、神奈川県皮膚科医会の先生方との友情（先輩の先生方には友達扱いで申し訳ありません）が、これまで以上に深く厚いものになりましたことも、大きな収穫であったと思います。皆さまに心から感謝申し上げます。